

於
185
2

櫻姫伝曙草紙卷之二

江戸

山東京傳補綴

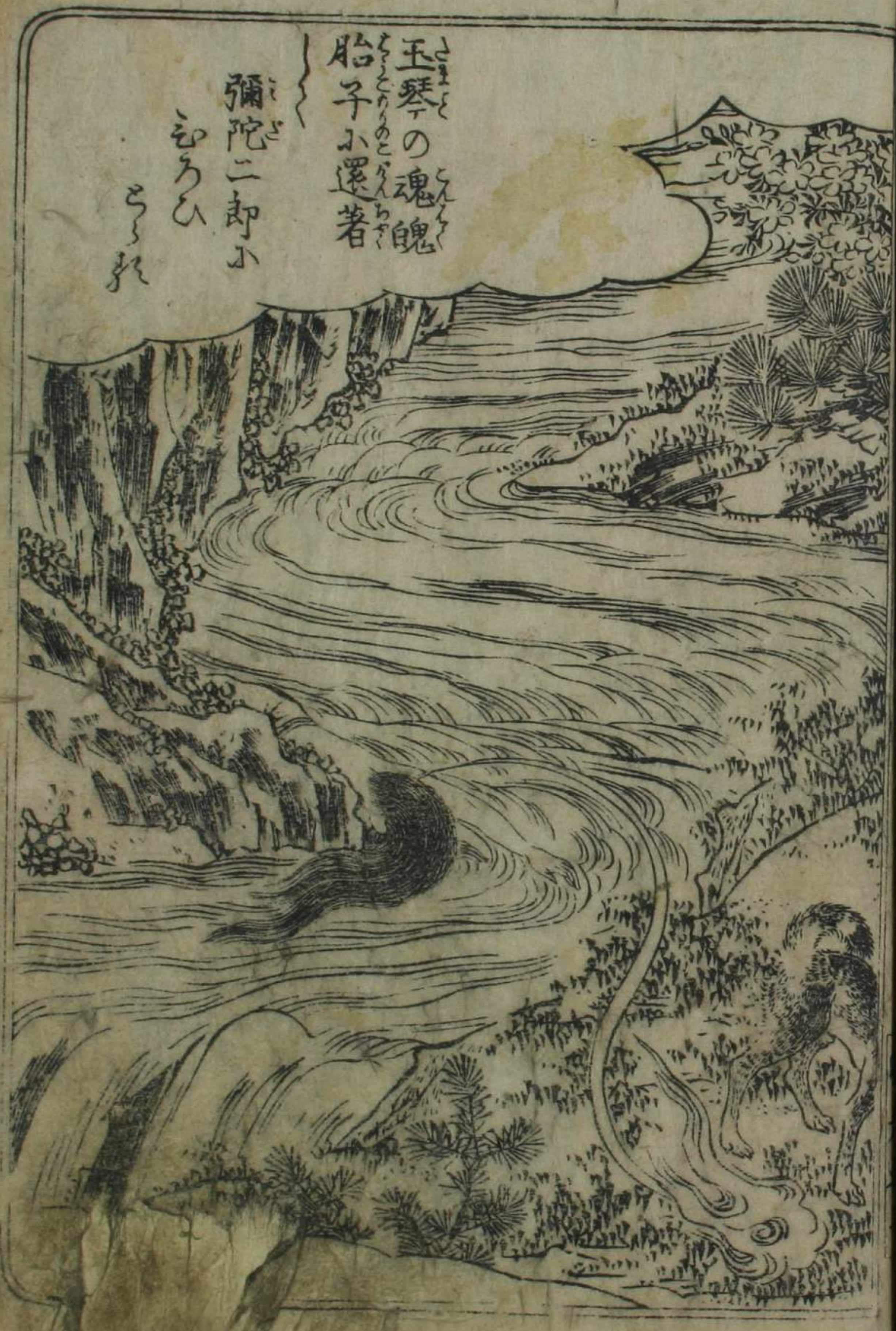
第四

玉琴魂魄還著胎子

運くもの弥陀二部へ佛堂建立の爲後負錫杖とつれ回國終行
 者不打扮く山陰山陽の國へめぐ旅中不於く年がかさの己母
 建久二年の春のぼふりら般路のどく丹後國不つさめあしり
 古郷丹波ふらりくさども罪せらまく國がつれされるさじバ足が
 いまんことしららりわりされど今ハ心があらまく先非を悔のらくハ
 一切と立て旧悪と償露どうりも洪恩と報せんのとさか公のれがい
 古郷まらくくせめく土がふすんも公やりあり且ハ主君の安否もよそ
 からくとしくとひ人目がくらり望ふらぐとかげれ大江山が載り

穴穂の観音堂小通夜一翌日未明ふさく谷川の流き下のどろどろと
やとひくれ折しも小笹のともぎりさう裏ふ赤子乃泣声頻ふきこと
二部ぶうり立よりさくさくげまぐ一隻の犬赤子のまりくびとくさくさ
わとぐくく殺さんど勢あり不便の度ふとひいそぐく錫杖とらりて
犬と追やり赤子なごらのげくさくさふ玉のやうさう男子ケりいませ
胞衣もくまもさくさ總身血ふ流りて生とくれ侍とさくのまりくびおたの
菌ごさくさく命を保つづもおがえぬとさくさく泣ぬいくまぬ者の
捨子小や憐むべいとさくさくあは其辺と顧ふ谷川の岩の回ふま
く死屍よとさくさくめ眼とさくさくさくさくさくさく黒髪を乱し
女の屍とさくさくめんど面の皮をむきく目口鼻ののさくさくさくさくさく
めくらさめ光景さくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
五臓六腑乱れし玉の

二部おのりくく扱へ彼大此屍の腹と喰破りく腹籠の子とくさくさ
くれさくさく面の皮をむきくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
衣服とさくさく赤裸とさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
こさくさくさくさく此子なごらとくさくさくさくさくさくさくさくさく
くさくさくさくさく冷さくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
かお稍とさくさく川水とさくさく怪哉かの屍の疵ローり炎くさくさく一塊の
心火飛くく二部が懐ふ入りさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
赤子蘇生とさくさくさくさく泣くさくさく二部熟想ふかの女吃とけりさくさく
さくさくさくさく苦痛一神心も悩乱しとさくさくさくさくさくさくさく
冷くさくさくその腹は龜の子かく一命と保つづき道理は今の不思議
さくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく



玉琴の魂魄
胎子小還著

彌陀二却小
むろひ
らる



子とあり一念深く魂魄此子に還著し一命と保ししは
我此子に養育せむは人の善根のあはれむごとく何方の人の
知らざれども偶我目ふかるは宿世の深き縁ありめかく劍小身
屠らむと大に死をうらうらと此世にあり地獄なり憐むるに
いつそのあつりの土に穿る屍を埋め一塊の石をおれかりの印と
み一釘打あり南無新靈頓證佛果菩提阿弥陀佛くと唱ふ
回向しつて両立去り情のあつる人家のつらう小兒は湯と
乳を乞ふのまゝめあどしけき中勢ひつさく命とさるべう又
二即ちぶさくさうさうとこれと始さうさく小兒ある家と又さ
と乞ふやしあひつらり旅中といひ男子の身あつてかく養育
いさむらあらん推量べし彼屍は乃是玉琴なるなり大江山乃
谷川に沈みれぐらと繩をのりて此に流まつたなりゆの飲
まうと奇怪のこゝろのつどや

第五

轎裏遺書公連償鼻

叔又彼玉琴を奪とす夜篠村が屋敷の子細を尋ね其頃も
篠村八郎公連に重れた病小臥し行歩りまらざり子二郎公光と
今年十五歳ふりり角の若者父の病を祈禱乃爲出雲
明神に通夜し家あつて折も折時も時あつた人小此夜かざり
玉琴を奪とすは公連命尺もかざりあやめ人父子のうら
出のりいさむらとさうさうとさうさうとさうさうとさうさうと
さうさうと兼く其空虚をうらぐひく奪せらるるは其夜待
盗人のつらうさうさうと起合せあつと叫つる色とすつて篠村八郎

勇氣なくまゝ老人あまは行歩かまぬるがう大刀おつらう
よりめれつ新室ふてせゆさういふとや癖者へ玉琴さうご
と逃失らるあたるり八郎大お驚れくらとや残念や我重病小
のどつとひさうと才とわし拳と小ぶらうと憤々れぐ病小氣が
よりよりさうさうあまは忽絶入して倒より侍女等あつてあめれた打
ちりて業あどあへ介抱しやうと蘊生けさば病床小扶ゆさてふさ
しめたり二郎公光へかくとハ知れど夜明おつてりて家お故けら
此夏をすく膽魂を失ひらうと家僕等あまらう四方小奔走
して其日暮あんぶらうと賊の行方あまらうとわらうと身体疲きて
一旦家お故れ途中少く同家中の壯士田鳥造酒丞義長といふ
者女乗物お守護し來れおめれぬ時お造酒丞二郎公光とあまらう

らうとつれらういふやうといふ所あつて和殿おあひぬ今日主君義治公京都より
御飯館あり小人お召く命せらうと一条へ玉琴殿御流お宿し
とや臨月お近ればはつらくまらうとあつたあふべれおのどとく近
のどめと野分の方とくめ一家中の者といふを御披露しとあまら
夫お付て玉琴殿と宮脇村の下館お引取しとべしと小人お命ト
あふらうと和殿の宅おまらうとわらうと玉琴殿をしりひ取今彼所
お送り去らるは親父八郎殿しられ小人重病あつて行歩うさへ
されへ兒子公光お代らうと送りしとせんといふと折あつて他出
つとめ若途中あつてのひむらけ具し玉りべしとやまらうと語り公光
それとすく大おびやう何人ぞ玉琴殿をとりとるうらうとあつて
父の調ふつといひまらうとあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

打連うちつらまゝくゆれり相あひやどまゝ下館しもやうおひり造酒丞このどやうげが下知したちて乗物のりもの
狐座敷きつざおめれのぼ戸とおめりたらんべがふいふ玉琴たまごあいのぶげく八郎はちろう
公連きんづ朱しゆお深とこてうらば伏ふしか居ゐり造酒丞このどやうげが立たり抱いだきおしりくつんままべ
腹はら十じゆ文字もんじおられ破やぶりくや息絶いせえて死しつらんぬ時享年じやうねん六む十じゆ歳さい也なり口の裏うらお手て肥ひ
やうの物ものおめりくこころ苦痛くつうの息外いせがかりへりきさるやうおめのかまへるままべ
かふあさましく悲かなしりけりままぐりあり皆此体みなこのていとてく大おほお驚おどろれたここ
何なんゆゑの自殺じそくとて更さらお不審ふしんの晴はるざりり二即公ふたつとくこう光みつる途みち中なかより
どうく公安こうあんううざりが事ことおようぶかひのま一個いっごうの越度わくだといひは腹はらさるさる
父ちちの難義なんぎとてくつんののと覚悟かくごと極きまつたそひ来きがめひづらづら
此体このていおめりく用もちもろくももまえくかほひきどおやめめの面前めんぜんとと堪たへ
言こととてくどど只ただささへんふままく哭なみ居ゐり時ときお十郎じちろう左衛門ざゑもん義治ぎぢ此日このひ

下館しもやうおめりりりか此支このしとてく奥おくの間まより立出たちだ二郎公にじちろうこう光みつお子細こさいお同どうと
一いっつろ所ところお造酒丞このどやうげが八郎はちろうが懐中くわいちゆうより一紙いっしの書かきおえつつけおて義治ぎぢ
呈まへと義治ぎぢおめりたらんふ兼かねく用意よういやけん自筆じひつお以もて記きし
とらめりらふ命いのちどく讀よみしむらふ其支言そのしんげんの旨趣しゆすいへ

相公このまづ小臣こじんおめりら者ものかざりるあやかやくの人のうちより
えりやや一いっまひ玉琴たまご殿どのとあづりままううおかの婦人ふじんの御胤おんいんと宿しゆく
一いっく大切たいせつの身みおめりば昼夜ちゆうやおとらひり守護しゆごしりらふこころど
昨夜こふゆ玉琴たまご殿どのお奪うばつてままらんべりぬ小臣こじん重病じゆうびやうお臥折ふしやうおひ
ああく油断あぶらだんのいり露つゆどどりもけしむら言ことあひりままかかり
殺ころし侍さむらいおめり君きみの討うつしめらままことぞ私わがお死しさるハ臣しんら者もののけ
おめりどどしりへり君きみ御仁おんにん心深こころふかるるおととくく自殺じそくとめり

あまはしとらう時ハ一家中の諸士不對して顔ありと存ト是非カ
命ハまごどくかくありとらうこれ罪カめらる理カ

こひねグのくひゆり玉のまじり見子一部公光のみ小臣が病カ
祈禱の爲出雲明神不通過夜一々家あつど其夜のゆ実不
存せざれば何ぞ彼御慈悲心とく自玉のまじり

あどらゆふ記一最期の急不臨とも子孫不親心のおりひやれ
殊不哀深りたりなほ奥の方不盗人の取おし物と拾ひつれ侍り
これと證不御尋のふべとわさく相添ゆる豊紙とつれえまじり

尾長の蝦蟇あり義治かくだめ皆これかゆい大不驚れは月二部
公光不子細に尋らあど公光つづふ物語はむ扱去年捕へつれ
婦不と奪蝦蟇つひの賊とも余類の所爲不疑ありと評議しり

義治ハ其始終かまじりて誦もあく只さうりあれたる物と
これゆひひかり公光これかまじり牙うらの骨と破りうりあひて
やと差添と扱腹ふつれとんと義治色りつれとめとめと

のひとんバ造酒丞やうその刀かひだりめ時不義治面かふりし
のくくハ即我命とまじり私不自殺とらると誦とおりのふはも又
我のうらふらげど自殺せんともか何の道理ぞ玉琴賊かうがは

といひもいま生れとらめと汝とづらあひつれとどこの暇とむか
賊不尋知一玉琴かたりと父の罪とも償ひ我愁かもやとめ
若年とらひひあど愚かれ奴も活く功とまじりや死

我不北月んやのまじり色一励し責けし公光ハ一言の返答も
叫苦一色しおきれりつれと伏居ら義治表あ怒の色とめ



去の卯
公連 村八郎
玉琴 公
分説 かく
轆 裏 不
自 殺 しく
衆 と
しき
あふ

とゞも裏あ情の意なく不幸あり一個の良臣が失ひさる
深く惜しかりひくひと涙さうらうらなれば公元主君の仁心感
ト頻ふ落涙一大臣思慮浅くそふをつたけさうらな
ねらうくはちの御暇とまつさう一かの賊たてひ天小路あり
上つ地小門のりり入る飲さうらう深淵の底猛火の裏ふぢうとも
念力の誠な以て尋中一玉琴殿が奪へし御心安んぞぞと
つひくねあぞ義治のうあもいとゆかさうとさうらふとらひく
ぬ一父がまたうら此傳とく不菩提所へ送りゆけこのひく打らる
つ奥の間ふりりけさバ公光の其背後に仗拜と感涙袖とをうらり
造酒壺のひくねハ小人先刻玉琴殿がひうひの為和殿の宅ふりたる
時清親父もさうらうらうら実ハ昨夜玉琴殿が盗人ありぞとの
小臣直小相公はあけさうら衆が賄やと御切ひの乗物小人
を奪せ玉琴殿の侍ふりてあうら取まりさう此更ハ見子もあさ
知れせ玉りねあといそれゆゑ自殺と察さうらとさうらも泣ま
らべね公底とんえんぞ若うけひくごんが其伝死ぬべね面色から
義氣一徹の老人あさびねもとまるはせめさうら不任と下
望のさうらうら果てはわらわひぬ和殿の愁傷さうら
とひやうねけうへちや玉琴殿と奪へし目出度取衆のさうら
亡霊のよれ供養とつひく涙あうら小慰むさバ公光はさや
うさう今日さうらとあひせむさうらさうらべね最期の日
あもあつさうらさうらと送る更さうら宿世の報をさうら
しれらう言つさうらむせさうら倒さうらバ造酒壺其歎へうべあれど

時うろろの主人へのおとまりあり小人も送れべしとてにらへ
乗物とつれ出さしめつひ小野邊小送るゆえ夕の霞小まらて
いさく煙とあしそめ哀とるなれ文のそくあり

第六

野分方季春 誕櫻姫

去程小義治の世嗣とまうけく宿願とどげりと喜び小らうむ
玉琴とうぐと野分の方の隠悪と夢おも知をも一向愁と居ら
々が野分の方の計な志とまうらと心中小喜び玉琴の懐妊乃
様子且うぐとと公連が自殺のこまもてめくゆらう体
小のくはとりの小驚れ悲むとほわつぬももどれとて假
哭まどくはとバ義治其体をつんてとてうら誠あるゆえおまを
かじおれとらん我誤ありと申打明しく縮のうら小もを思ひらべ
から凶事へあつたれりのとと悔まこえたりとてうら後野分乃

方うろぶふんぬらひと尉のくまどかおのづう夫婦の中前のとく
小睦と深くあつひふとあけくならたれバ義治ととどめ一家中の
花びるあめなうと神佛小安産瓜祈と臨月遅くと待侘けるが
夢のごとく小その年もく建久三年壬子の三月十日とつひみ
むらむら女子瓜安産一たり義治の喜びゆべとと切此女子乃
名瓜何と名づくべしやと高議しゆが三月十日花咲盛る小生と
あひ殊小櫻町中納言成範卿の孫あまは櫻とひく名とまべと
心決しと櫻姫とと名けまらる
抑櫻町中納言成範卿とと武智磨十二代の孫少納言入道
信西の三男なり長門本平家物語と案る小彼郷瓜櫻町と

櫻を殊小愛しむひく姉小路室町の宿所小惣門
 の見入より西東の町を越え並木の櫻を植通されり
 春の朝をもちこち人異名ふ此町に櫻町とす
 又一向花小心を移し花の陰を守り明されれば櫻本中納言も
 春を悦び候侍一人かきこ
 源平盛衰記云成範御
 珠小執りとられける桜の七日小咲散るるに歎
 の命を惜み泰山府君祭をけり天照太神小祈りさせ
 給ひなれ三七日の齡を延らりさればごまひひの給ひる
 千早振現人神のかとされば花も齡へのび小けるるな
 御感あり花のりふ此人をぞとせんとく勅書櫻町の
 中納言と仰るる云くかく櫻を愛む一人の孫姫あり櫻姫と
 名づけりしありしなり

今年建久三年鎌倉におり頼朝公征夷大將軍の宣下あり天下
 尽く賀詞なれりしありしなり四海大不靜寧ありて万民安堵乃
 名ひさせり建久九年つぎと十三代土御門院の御宇となり正治
 と改元あり正治二年つぎと建仁と改む建仁三年つぎと元久と改
 む元久二年つぎと建永と改む建永一年つぎと承元と改む年々
 馳りたりしとありしなりとありしなり流水の海小改りしなり
 建久三年より建永元年まで十五年の間就鳥尾の家無為ふ
 物語へ記されたり

第七

清水清女春戀櫻姫

初十六年と云く今年承元元年のつらり櫻姫成長して己十六歳
ふありたる其容貌ハ唐土の美人楊氏虞氏王氏のつらひちえねべ
知らざとも一乾坤のあづきもかえさ蟬娟たる両鬢ハ秋の蟬の翼
小似く宛轉する双蛾ハ遠山の色ふまきふ秋の夜の月が待くらふ山
出る清光ぬるる如く夏の日の蓮をかりひ初く水が穿て艶とる
よりもしさだめ誠小人間界の有ふのしと月宮の嫦娥下濁降り
貝闕の龍女凡地不出と疑のし深窓の裏ふ扶られて人とあり
なれば軒端の梅の白いとみむく谷の戸がゆる堂のまきうらひさ
似たり都より教箇の侍女が召抱りかづせりろく乃遊藝が
学ばせくらがむをへやうくがこれバ和哥の道糸竹乃業ハ更あり
十種香貝合ある花はむとびのきとひまきと暁さごとくふとまき
さんバ義治夫婦のありあつどまぢひ日夜寵愛して掌中の名珠より
もあたまされまじとてまじも人の垣間見ぬるさごとまくりといへとも其
容兒の美麗なるまのまゆめく近國ふさこそとく公家武家といへとも
婚姻をのぞむ者おやく又まじ一人の女あるとバ他家へ婚娶とせりひを
よるべととあつるべく者へ婚とあつんこと願ひぬらふ同國ハ信田
平を夫勝岡とのふ者なり其先祖が尋ねお百濟國乃人百午の孫
信太の首といふ人乃後胤なり姓氏往昔ハ當國出雲の社辺まきり知行
せし不どの大家ありけり當代平太夫が時おつらり家漸々衰廢して
けりさつらりといへともいまさ遺財尽むと田庄をかやく持家人ものまき
のりて鷲尾ふとささかあつらぬ富家かりたりされば徒然草ハ丹波
出雲といふ所の信太何某が知る所ありとありとらう後兼好が時代

まづも此所不信太の一族残し住れおや此平を夫容見くまの醜惡
 おて性質さいやく奸倭かりとらるるを驕奢お長し酒色不耽と
 不仁と好む礼義をわくど田夫野人おひとれ輩ありわさりのひま
 お櫻姫を相看しやうん深く執愛して轉想お逼りかまらる者を媒お
 たのこころこまへ娶ておとんごんごん婿とあらんとのでこころ義治日來
 平を夫が爲人とあつて居ればさふらうけげのこころ彼が行の
 の一れをかどてこめ誹謗しるお媒人の口を閉面目を失ひて立
 ちりありのまふ語を平を夫大に憤深く義治をふく遺恨の
 原とをかりふくは是乃櫻姫の一旦零落とてた端ありたり扱ひめ
 へ祖父成範卿の性とうけつたさふやめらるの花と好むらあも
 けあつて櫻姫愛し庭りせお婿と植並く春毎おあめあつたらつた
 都あは花の名所おしつ上京しとれお願ひられ義治あはな
 許し家人田島造酒丞美長并お山吹とらふ女兩人お旅中乃守護
 やうけ旅のよとやひなそのへし此山吹とらふ家人佐伯平弥二と
 りよ者の女あつていよと年若けいとも志正しつてわとれ女あれびて
 扱ひめが守り女とあつてわづせゆるあつたり其餘侍女女童下部
 かうどあつて具さつて三月上旬お発駕せさつたりわとれ扱ひめは旅
 めおしく殊お暗和の天氣お催され諸山の花お発春草青くつた
 野外の好景お目さむるこころお氣もくもさうれとらて行程の
 うとあつておとらるるもまきれどわとらるる都おつた旅舎お逗留
 一此彼の名所舊跡と認めたり名花とつてびびるが日々おあつた
 地主の扱はんこころまづ嵯峨仁和寺北野のつと道遠しつてひま



櫻姫
 清水小詣
 地主の櫻
 賞
 和舟歌
 清玄櫻ひめと
 春意と

清水寺お詣りたる梅ひめ此日の粧扮いんとなれば黄金銀お玉をくく
 くつらつら花の釵をあらめゆふは翠の髪風流つらつらて蟬の
 羽とらつらみたるんぐ如く白綾の下とらつら小雪の肌瓜のつらつらひ縷縷の
 上著し今様色乃袷衣お繡匠の手瓜尺くく吉野山の春乃
 景色と繡し袖口お五色の紐とらつらとらつらいことさうふかふじと
 著らつらつら数箇の侍女女童と左右おとらつら銀地のつらつら扇
 額おくりへ日のおくげお遮らつら蓮歩おろく移せば青柳の風おさひく
 お異はつらつら初花の雨おふめれうとあやまる田鳥造酒丞山吹乃
 兩人の前後と守り轎子行厨おと後お持りゆくるさしなめ上臈
 とらつらつらとらつら行粧あり貴賤群集の都人美女おえのえら
 且本堂おつらつら観音と拜り切山中の花をらつらおつらつら
 名花あり再滝のゆふくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 残さつら散もつらめめまさつらの時とらつら三條の滝お花のけのうつら
 さらさらえもいささねいささねいささねいささねいささねいささねいささね
 より硯おり出さつら短冊おかきつけ花の枝おひさびさひけけけけけけけけけ
 其比當山の住侶敬月阿闍梨とささつら承久一乱の時おつら
 官軍おつらつら宇治の合戦お敗り東士お捕らつらお執られぬ
 とらつら捨つら武士のやと宇治川の瀬おつらねつらつらつらつらつらつらつら
 殊勝の法師おりが東鑑其徒弟お清玄とつら僧ありもつら
 いまご若いこと性貞聰明かつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら
 中山の嵐お讀經の色とつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

三密のつとめらゆる八正の道とて、妄想を断つる世塵を
 道力堅固の行とて、まじくどらじけり。曾魁壘の諷語、
 曾魁壘の諷語、雑劇の院本、
 等ふつくりと、勸懲の意をあらめ、普く児女の耳に
 清水の清玄法師とのあり、是あり、東坊の住持、
 清玄の法号、これを據とする、欽玄の水也、
 清玄の法号、これを據とする、欽玄の水也、
 清玄の法号、これを據とする、欽玄の水也、
 清玄の法号、これを據とする、欽玄の水也、

清水の義あり、又不可思議ありとや
 此時、清玄香水を供せんと、くづり、
 開伽桶を提ぐ、滝の水と
 櫻ひめ、地のとゆげ、ふるらるる、
 一陳の冷風、さそ吹、
 神を酔わす、
 如くあり、く世あり、
 開伽桶をこり、
 桶をけ、水、
 千代能、
 兄のま、
 桶を、
 忽、
 明月、
 雲、
 魂空、
 佛戒、
 二脚、
 諸人の、
 依、
 夷坊、
 移、
 山、
 高、
 長、
 武、
 鼻、
 太、
 醉、

如くあり、く世あり、
 開伽桶をこり、
 桶をけ、水、
 千代能、
 兄のま、
 桶を、
 忽、
 明月、
 雲、
 魂空、
 佛戒、
 二脚、
 諸人の、
 依、
 夷坊、
 移、
 山、
 高、
 長、
 武、
 鼻、
 太、
 醉、

あく月おつた小倉山その名はうればなりたると甚もとらふうらむつた
 浪く踏くと歩来りやぐつと一人の奉と打ちり侍女下部
 打倒一人の孫ひめを捕へり小腰ふらふと二人相扶合を死かぞ
 お逃去々おぼ山吹の大お驚れたらふと追行ぬ田鳥造酒壆此
 時布施物おとこのん為本堂お行り舞臺の上り此体と入くふ
 おころた韋駄天の如く追つておのふお追行なりお山吹は
 清閑寺村のわらわ追つてお姫と落ちたり竹林のうらふおまどとさふ
 しころ早參と賤か等農具ととやげりぬわらわ危死
 所へ造酒壆やうくお二人の癖者お踢倒し孫ひめをころす下
 山吹おめりるお姫と落ちたり竹林のうらふおまどとさふ
 打分れ武士二人おれぬお酒のわらわおまどと造酒壆をころす
 二人お頭つらうと引くさふお前お倒さる二人の武士起上り都て四人
 一度お編笠とかるらつとさふ箇ノカお抜く斬うけたり造酒壆お曾剣法
 と熟練し殊お早業の達人あるは是等寺の物の数ありと此頃はいま世お
 まれお賜扇とつて農具のわらわおありたりお四人乃剣お
 ころしとらふお手お腰刀お抜く水車のめがねが如くありまじ
 られお鬼くさる光の雲さつとぬ稲妻のごとく風くさる音お指お
 あつと暴風お似て近づくともあつとわらわの四人もさうお膽ふた
 筆とつとさふひろむ色なく陰ふら陽おおつ火おたとらし
 闘り造酒壆おつとさふらうおひのうらおお一計と生どおの賜扇と
 以て楯と波上おむらぶお蒔のどくおお前おつとさふ
 下とさう後おのさつとさふお時おまじもおれおんとむらとさふ



加多田鳥造酒丞
美長
清閑寺村
四十七
勇と
うら

それまでもうくひくめれ未だ四人の刀皆つづふりうく只扇扇小敷
箇所の疵なかりぬかきありては時むり闘る造酒丞の勢ひまき
猛しく武藝の秘術と尽む四人の者なりと戦疲し中剣法なれ
一人刀を打おとされせんとてへんきとて把さたり髻を打うけ引倒んとて
造酒丞手の中これ斬折ぬ又標ととりて打おれを刃をぬり
打おとすからりぞ不売姿とつうく目つふし小打或は杵さうりて
打つりあどと三人の者其虚不ぞとてとて写るも斬あしき
造酒丞身のかりく敏く恰も風小玉屑を飄く雪の瓊花を撒く
あゝ阿吽の呼吸おつと忽一人と左り袈裟衣斬おとす
横おとすひと一人は腰車ゆで斬たり残り残り二人は此特におおれ
のまゝ手は肩を深く深田お飛入り逃失たり造酒丞は素戦と好む
あゝぞ只姫の身のうのそ氣づつうくれはあはれも休息がく田乃
水ふ刀をさきとて鞘をさめいそつうく姫のあはれをさきとてひゆれ
たり彼四人の者何人ぞあるは則是信太夫が家人等あり
主人の命より様ひめの旅行ぬらぬひ奪とらんぞとて又と仕損
せりありたり平ち夫の家人を打おとすもとて憤多とて切様ひめ
山吹お扶られぬのぐれゆれ此地の案内を知らぬ路お迷ひて宇治
川のをとらまきとてとどり来つづかおひひげざれ危難おひておな
おどろくめとらうへお歩とるおとらうとまよとの道の小石お足とて
るひやとて文侍疲しとてそのま路お倒伏のとらうへひふりめれ息
もきつゆふありぬ山吹の周章あめれ抱起す薬をまわせん
それぞとらうらふたくりと湯水とておひとて近きありりお人家も

まさればこゝろにいとどとどらまきどひと誠おせんうとあれ折しも
川さひ柳のかけ小櫓の音ひびきと一艘の小船と漕出船中のあはれ
ひびきとあれ女中おりのアムンよりありげあの上臈の俄お胸病あ
えうけそりさぞまじびくおがささん此船お系まわうして衣抱
あとの山吹これぬき背後を顧こゝろ情深死おせうまんのよ
かごと危急の難義小通りゆいりくかきどいあどくそと借とくんと
つべいさむへく船お岸ふつぬ山吹うれく姫を抱く船お移
けし小船中のあはれ印籠より薬ととりせと湯あとのほじめて
その小舟抱くそのうひありく探ひめや胸のうろくさ狐さきしんぢ
つたぬま山吹いよめ息物とつさく安堵のよひくぐらひめや
頭おあけく船のあはれとさんふ年のごころ二十とらうとささん又と
また美男のう鳥帽子商人の太太郎やとめらん今様の鳥帽子
小紺極の紺五郎まじり漆く人褐色の袴著とささくくかざら
うろ小鞆巻とおひ衣紋のかり六波羅様お著あていと風流小粧ひめ
大太郎約五郎 共お盛衰記お出 又小船中のさむとさんふ唐花お織出く毛席おあ
提盒標子やうのりの偏提あどらららじつ芥川の根芥桂川の若鮎此
まづれの氷魚あども着あ調はらん船のあはれかかへくわおれ男の
童野風炉の火とのあはれ居つうあ人の探付るおふおのびと共互
しとのかのれを探ひめおせえ船のうろくおから美男子ととど
あくくひうひ居まお耳をとり親あらく何とのおおとこののりあ
唯どらうあれ聴お小おらうぐくくくくくくくくくくくくくくくく
かろひの波のあうくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく



三木之助
 伴宗雄
 宇治川
 船遊
 櫻姫の
 急病と
 とくみ



のちくのおりひ種を植とめりり若人もおろどおりのひ小晒とこり
ぬめて時うつり日もくれと夕月夜のかろろげあまもこのひ
とみやほしほ媒なりとるあん橋の小島ををれあろるあれ兵船御
のま四阿家とわろ船小来あふゆりて八千こせもあれ此流乃
翠の泳さぬたがひのおりひふろべつたれ風情まら山吹ハ志
女あればゆる若人のわろろ小姫の長居せんとめろるるいと公はさ
あつくは場の思ひ謝一姫を催しとまろるあんと一たる時折一
田島造酒丞とつ子来り侍女下部等も連ふくせあつまり衆皆
姫の言あさ喜ひ取路とらまじと轎子小扶のろくたれ姫ひき
の若人を顧とつれと惜む若人の姫かえかろつ公は残しこ
船かぞりたろひの偷眼おかりひとあしじのいのめ山吹乃瀬

乃ぞろ別去りり若人何人と尋ね播州兵庫の郡士伴
希雄の息男二本之助伴宗雄とのみ者ま頃日上京一此日宇治
川おぼろおりのひろのど様ひめかえとめけつたりと造酒丞
山吹へ様ひめ守護しと旅舎お飯り此日の事かろりのひく
四人の者等へと信太平太夫が家人なり油断まろとぞ
改國おとろとぞ翌日俄お飛足しとぞ

第八

退去清水清玄落魄

こても清玄の様ひめと春意しせめくの公やうと花おつける短冊
とろくこのの哥の意のやろく手跡のろめつるおのとゆりのひま
ころれがとろあさほくおはれんうあま同おりのひとゆろへ一室の
うちお引籠観法定坐せし胸の佛のいづくおかくまろろらんあ

信の幻小を眼小を夢みたり少一まじりめが夢みたりとて
 夢みたりとて忘れぬ容引引知しは
 と捨るかのひふのくおのひわくくもまじりめが夢みたりとて
 まましく愛欲の水小智恵の火とてわね 執著の雲小修観の月かとして
 のるまもあつまじりめが我まじりめが短冊をいひて病の床小卧
 食まじりめが唯うつらうくく凡百日をらるるやわとて
 命もあつらふえいふが師の房敬月阿闍梨とて教化しあつた
 うらましく胸のわくわく病もかこころ熟思をふ我道力
 のたゆましく時を天魔のうらましく煩惱魔のこまじりめが
 かくみく若断を利剑とてわらわどんハ他生の悪縁とてひた永劫悪
 趣小沈べしとて佛小懺悔しとて妄念をくくふべしとて志小励
 かくつれとて身自由あつらるるのびくこの滝小垢離とて一室の
 内小不動明王の木像小安置し護摩壇小かま法衣とあつて
 壇上小のびり金鈴をありまじり最多角小かりのく明王慈救乃
 神呪と誦し心不乱小祈くれば護摩の煙ハ一室小うづまこく黒雲の布
 密とてくく金鐸の音ハ堂外小響とてくく霹靂のこくく小
 異あつてくく悪魔と障礙とあはれとてくく丹誠小
 つし身うら汗小あつて秘密の法小修し志賀寺の朝勸上人ハ御息
 所の哥小びく正覚小皈し清閑寺の真慈僧都ハ仁人の哥小よらて
 愛心を轉じたるためしもわれのここの短冊とてくく火中小投じ
 自心小試しえんと観念深く眼を閉まじり不動の尊像ありくとて
 まれあつたのびとてくく眼をわくわくくくくくくくくくくく明王の念慈



清玄自懺悔と正覺の
 飯さんごと祈ると
 心も不動心怒の
 容櫻ひめの艶麗
 さる姿ふりええく
 凡情出離
 ちがく

の容忽様ひめの窈窕たる姿と見えかゞらひのごとく目前小のりあな
わさしと再又眼をととのまば又明王の容とありやけに姫の姿と見え
さぶまの明王の容と見え入りて念珠の数百八の煩惱さう清滅
さぞ妄念まうと出離せざればとと落涙我がまうと誠心は
らもさういども凡情をまぬらるるのあし宿世の報あらんは
いせんまは佛の眞罪うけぶくは背うぶとむけかのひめの住不姓名は
まねども我執著の一念あうづう小のりともさうのわいひとさげく
わくさうといひく眉をさうさうと眼血をさうさうとられいけはく息の
熾のさう念珠をさうとひささうと火中おなげの日来誦しとされ
經巻も尽くひささうと投火されが猛火盛んお燃あぐりいげと
明王の火炎とけらぐく焦熱大焦熱の光景眼前おあうぞ清女

まほのさ小のれく獨結三結羯摩花四蹴散くもさうとさう形勢三井
の頼豪が氣と化とさ勢ひもわくありつんとおもわれかそめんと
つへうとさ時とさ同宿二人くさうとさ押まづめんとさうとさ左右へ
合破とほたさうさうとさ捺落おかつれともかの姫ゆさあうとさ
姫さひめと叫くく狂人のさうさうめれつとさうとさうとさうと
ともあうと遠去さう



